

大学生のインターネット事情について

谷口真嗣

キーワード：インターネット、携帯電話、スマートフォン、意識調査

1 はじめに

携帯電話市場では2011年度初頭よりスマートフォンの急激なシェア拡大が行われている。それまでのインターネットの活用方法としてはパソコンからの利用が主流であり、携帯電話やPDAなどからの利用は補助的なものでしか無かった。しかし現在では誰もがスマートフォンを手に入れることにより、インターネットやそれらを利用したサービスが気軽に手元で行えるようになった。勿論教育現場でも例外ではなく、講義のシラバスや休講・補講の確認、とすれば講義内容そのものがインターネットに掲載され蓄積し、学生たちがそれらを利用しているのである。

さて連日のように若者たちのTwitterやFacebookなどのSNSへの書き込みがニュースなどで取り上げられ問題視されている。それらは彼らの特別な瞬間を演出した、時には奇を衒った内容で、多くが社会生活における一般的なマナーから外れたものである。公開するという自己主張や友人間での話題性に目が向き、公開後の社会的な評価や動向には気が付かないのである。

本稿では2011年に行った調査^[1]と一部比較し、現在の学生のインターネット事情から問題点についてまとめる。

2 調査対象

今回の調査は、常葉大学短期大学部の教養教育科目である「情報とコンピュータ」を受講する学生、及び、常葉大学の教養教育科目である「情報機器の操作」を受講する学生に協力いただいた。アンケートは学内向けホームページから行ったため、若干名の有志も含んでいる。

	科	1年生	2年生
常葉大学 短期大学部	日本語日本文学科	9	3
	英語英文科	26	2
	保育科	208	3
	音楽科	1	1
	専攻科	1	0
常葉大学	グローバル・コミュニケーション学科	19	1
	造形学科	40	1
	合計	304	11

3 分析

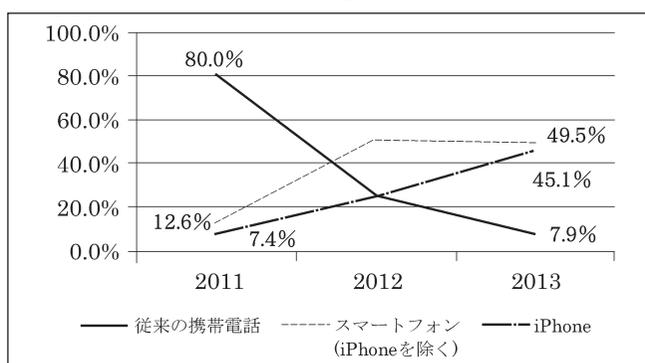
以下では学生に行ったインターネットに関する実態調査を分析する。

3.1 所有する情報機器と現状

3.1.1 所有する携帯電話

冒頭でも述べたように2011年以降、一般に販売されている携帯電話は徐々にスマートフォンへと移行していることにより学生が所有する携帯電話もスマートフォンへのシフトが予想できる。実際、今回の調査で学生のスマートフォン所有率が94.6%であった。(2011年度の調査では、調査初回到複数の学生から従来の携帯電話とスマートフォンの複数台所有の旨が指摘されたため、「主として使用している携帯電話」としての数値であるということを追記しておく。)

【質問】「お持ちの携帯電話の種類は何ですか」



※2012年度以降、複数回答あり

3.1.2 所有する情報機器の利用度

2011年の調査以降、学生の家庭でのコンピュータ所有率はほぼ100%であったため、学生個人が所有または専有するインターネットに接続可能な情報機器の利用割合を調べた。

【質問】「現在お持ちの機器はどれですか(複数回答可)」…①

【質問】「最もよくインターネットを利用する機器はどれですか」…②

情報機器	①	②
スマートフォン	94.6%	82.5%
ノートパソコン	21.3%	7.0%
デスクトップパソコン	9.8%	6.0%
携帯ゲーム機	18.4%	0.3%
固定ゲーム機	13.3%	0.0%
従来の携帯電話	7.9%	2.9%
タブレットパソコン等	4.4%	1.3%
その他	1.9%	0.0%

※複数回答含む

結果からも分かるように最もインターネットを利用する機器としては、携帯性と利便性に

富むスマートフォンが大多数を占める結果となった。学生にとってインターネットを利用するスタイルが従来のパソコンを利用するものから手元にあるスマートフォンへとシフトした事を表している。

3.1.3 インターネットの利用時間

常にスマートフォンを携帯できる日常生活においてインターネットの利用時間はどうか。以下は3.1.2で挙げた全機器における利用時間(①)とスマートフォンを最も利用する機器と回答した利用時間(②)を比較した。アンケートの際、例を挙げることを意図的に避け、インターネットを利用するアプリを含み回答をするよう促した。ネットを利用して意識を持っているか調査したかったからである。

【質問】「1日のインターネットの利用時間を教えてください」

【質問】「最も利用する機器の上位1位の1日の利用時間を教えてください」

時 間	①	②
30分未満	2.9%	3.5%
30分～1時間未満	9.5%	16.5%
1時間～2時間未満	17.5%	28.5%
2時間以上	70.2%	51.5%

①は2時間以上の項目を「2時間以上」にまとめた

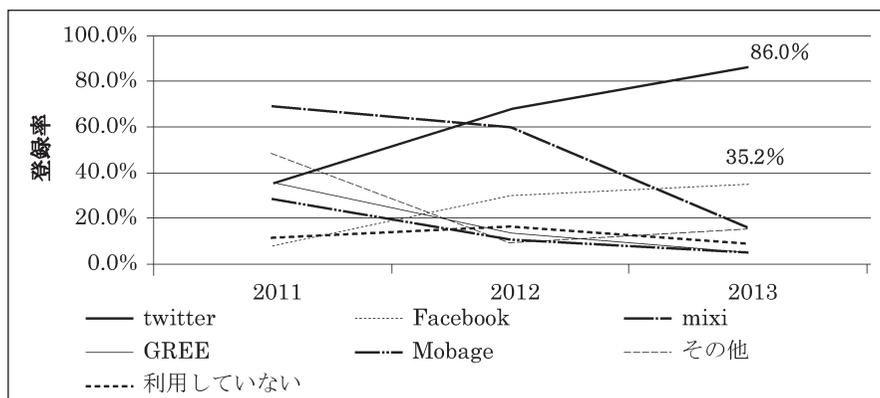
アンケートと平行して任意の学生に日常の使用傾向を聞き取り調査し②は過半数が2時間以上と回答するという予想をたてたが、それに反し利用時間が少ないという結果になっている。アンケート終了後に「スマートフォンのLINEやゲームなどのアプリで仲間と交流したり得点を競ったりするのはインターネットを利用しているわけではないですよね」という質問が複数の学生から寄せられた。意識的にブラウザを利用してインターネットにアクセスしていなければ学生、いわば一般のユーザーにとってはインターネットを利用している意識は少ないのではないかと考える。予想に反し数値が少ないのはここにあるだろう。

3.2 SNSの利用について

3.2.1 SNSの登録状況

学生のSNSの登録状況は以下の通りである。一般社会と同様に急激な登録・利用状況が見て取れる。特筆すべきはTwitterの利用者数である。学生数に対し9割に迫る勢いは目を背く事ができない現状であり、今後も増加する事が容易に予想できる。

【質問】「SNS を利用していますか（複数回答可）」



※複数回答含む

3.2.2 始めた時期と理由

以下はSNSを始めた時期とその理由である。登録時期は2011年と比較して数値の差異は少ない。また「始めた理由」については複数回答が減少したことで全体的な数値が減少しているが、「友だちがやっていたので何となく」がベースとなっている点は変化が無く、年代に限らず最大の理由ということが分かる。

【質問】「一番最初に登録したのはいつですか」

内容	2011年	2013年
小学生	1.9%	4.1%
中学生	39.0%	34.6%
高校生	38.7%	45.4%
大学生	9.0%	8.3%
登録していない	11.3%	7.6%

【質問】「始めた切っ掛けを教えてください（複数回答可）」

内容	2011年	2013年
友だちがやっていたので	88.0%	72.7%
世間で話題なので	26.2%	16.2%
なんとなく／暇つぶし	44.7%	28.3%
友達や知人以外の人と知り合いになるため	9.5%	11.4%
情報発信をするため	10.2%	4.8%
その他	5.8%	10.2%

※複数回答含む

3.3 ネットについて

冒頭でも述べたようにSNS利用者の急激な増加の中、様々な書き込みが社会で問題視さ

れている。しかしこれまでの学校生活において学生はネットを利用する上でのモラルや危険性などについて学んできたはずである。一般社会で問題となっている書き込みについて一部の利用者の問題と考えられがちではあるが、実際はどうであろうか。

3.3.1 始めた時期とトラブル

3.2.2のデータを登録時期毎のネットでのトラブルの割合に特徴があるのかを表したものが以下である。ここではトラブルの有無についてはその規模を限定していないため、友人間の些細なトラブルも全て含んでいる。登録時期が早ければ利用期間が長いいためトラブルになるケースは当然増え、表にもそれが顕著に現れている。

【質問】「一番最初に登録したのはいつですか」

【質問】「SNS等を利用して困ったことやトラブルになったことがありますか」

		トラブルにあったことはあるか			
		2011		2013	
		はい	いいえ	はい	いいえ
最初に登録した時期	小学生	0.0%	100.0%	23.1%	76.9%
	中学生	22.3%	77.7%	14.7%	85.3%
	高校生	16.7%	83.3%	5.6%	94.4%
	大学生	14.3%	85.7%	3.9%	96.2%

2010年に総務省から携帯電話各社に対しSNSへの利用者の年齢情報を提供するように求めたことで、様々なSNSではこれに対応すべくサービスや規約の改善がされてきている。例えばTwitterでは登録時は誰でも可能だが、「サービスは13才未満のお子様向けではありません。保護者の同意なく個人情報を提供している場合は、提供された情報を削除し、当該アカウントを停止する処置を講じます。」^[2]、LINEでは「15歳未満のお客様が本サービスを利用し、個人情報を入力される場合には保護者の方の同意のもとに行う」^[3]と規約に記載されている。またFacebookでは13歳未満の児童による使用が禁じられている。Twitter及びFacebookでは違反者に関する第三者による届け出による対応、LINEでは携帯電話会社からの情報提供によるID検索の利用停止等のサービスの制限が課せられている。これらは精神的に未成熟な青少年が犯罪に巻き込まれる事を防ぐためのものであるが、現実的には虚偽の年齢を登録したり他のサービスを利用したりと抜本的な解決には至っていない。

3.3.2 認識とトラブル

ではネットの危険性を知る機会とトラブルの有無についてはどうであろうか。2011年度と比較したものが以下である。

【質問】「SNS等を利用して困ったことやトラブルになったことがありますか」

【質問】「今までにインターネットの危険性やその対処法などを知る機会がありましたか」

		ネットの危険性について学んだことがあるか					
		2011			2013		
		はい	いいえ	総計	はい	いいえ	総計
トラブルにあったことはあるか	はい	14.9%	3.6%	18.6%	6.7%	2.2%	8.9%
	いいえ	62.2%	19.3%	81.5%	60.0%	31.1%	91.1%
	総計	77.1%	22.9%	100.0%	66.7%	33.3%	100.0%

予想に反していたこととしては「過去に知る機会がなかった」と回答した学生が1/3と2011年度を上回っていることである。実際には知る機会があったが現実的な問題として知識や記憶として定着していないということであろうか。また数値としては減少しているが、知る機会があったにもかかわらずトラブルに合ったことがあると回答した学生は依然として数パーセント存在した。

3.3.3 過信による危険

「インターネットは匿名である」という言葉がよく聞かれる。事実、一般ユーザにとっては個人を特定することは限りなく不可能であるが、現実的には過去に書かれた記事や他人とのリンク等を推測して個人を特定することが可能であると言っていいだろう。

以下は「知る機会」と「匿名に関する知識」について学生の回答を数値化したものだ。

【質問】「過去に書かれた記事や他人とのリンク等を推測して個人を特定することはある程度可能であることを知っていますか」

【質問】「今までにインターネットの危険性やその対処法などを知る機会がありましたか」

		ネットの危険性について学んだことがあるか	
		はい	いいえ
個人を特定することはある程度可能である事を知っているか	はい	72.4%	59.0%
	いいえ	27.6%	41.0%
	総計	100.00%	100.00%

「ネットの危険性を知る機会」があり、「匿名に関する知識」もあると回答した学生の割合は72.4%と高い数値であるが、「ネットの危険性を知る機会」がなかったと回答した場合は「匿名に関する知識」も半数であった。

では、実際個人を特定できる内容の書き込みについてはどうであろうか。

【質問】「過去に書かれた記事や他人とのリンク等を推測して個人を特定することはある程度可能であることを知っていますか」

【質問】「実名や個人を特定できる内容を書いたことがありますか」

		実名や個人を特定できる 内容の書き込み		
		はい	いいえ	総計
個人を特定することはある程度可能である事を知っているか	はい	67.3%	32.7%	100.0%
	いいえ	40.6%	59.4%	100.0%

結果からもネットの危険性を理解しているが実名や個人を特定できる内容を書き込んでいる事がわかる。勿論書き込んだからといって必ずしもトラブルになる訳ではないが、常に危険性を伴った憂うべき行動をとっているという結果であった。

3.3.4 家庭内でのあり方

では、家庭ではどのような会話がなされているだろうか。

【質問】「家族とインターネットに利用について話したことはありますか」

内 容	回答
ある	69.5%
ない	30.5%

【質問】「家族と話した内容を教えて下さい（複数回答可）」

内 容	回答
利用にかかる費用について	45.4%
使い方 / 利用方法について	34.0%
話したことがない	31.7%
セキュリティーについて	20.6%
twitterをはじめとするインターネットのニュース等について	19.0%
プライバシーについて	15.9%
有害な情報について	13.3%
その他	7.6%

※複数回答含む

【質問】「SNS等を利用して困ったことやトラブルになったことがありますか」

【質問】「家族とインターネットの利用について話したことはありますか」

		家族と話したことがある		
		はい	いいえ	総計
トラブルにあったことはあるか	はい	6.0%	2.9%	8.9%
	いいえ	63.5%	27.6%	91.1%
	総計	69.5%	30.5%	100.0%

家族間での利用に関する会話は約7割であり、各数値こそ少ないがインターネットでの危険やプライバシーに関する内容(太字)が話し合われている現状も見られた。また、家庭で携帯電話の使い方やセキュリティなどについて会話がある場合トラブルに巻き込まれる割合が低いことから家庭内での会話の重要性を感じた。

学生の年代はWindowsの発売と共にインターネットが一般家庭に急速に普及した年代である。しかし身近にインターネットは存在しているが家庭内での親の知識不足が以前より問題として指摘されてきている。親の知識向上が鍵となることは言うまでもないだろう。

4 まとめ

スマートフォンは手軽に情報検索が可能であることのみならずアプリケーション(以降アプリ)の導入によって簡単に機能を拡張することができる。アプリにはゲームやカメラ、TwitterをはじめとするSNSツールなど多種多様で、それらは機能としてインターネットを利用しているものが多い。その為、自分好みにカスタマイズ可能であり常に携帯し使用できることから、利用時間は長時間になり依存度が高くなる傾向にある。一方、昨今のSNS等の書き込みによる様々な問題は一般的なマナーの欠落だけの問題ではなく、より身近になり便利になった情報機器への知識不足が要因である問題だとも考えられる。教育現場を含めた一般社会における情報リテラシー教育では、コンピュータやスマートフォンなど時代に則した、今以上のより具体的で現実的な教育と共に家庭での親の知識向上が必要だと考える。

※引用文献及び資料

- [1] 「短大生のインターネット事情について」: 谷口真嗣、第42号、常葉学園短期大学紀要(2011)
- [2] 「Twitter プライバシーポリシー」<https://twitter.com/privacy> (2013/11/1 現在)
- [3] 「LINE プライバシーポリシー」http://line.naver.jp/line_rules/ja/ (2013/11/1 現在)

※ mixi は株式会社ミクシィ、GREE はグリー株式会社、モバゲーは株式会社ディー・エヌ・エー、Twitter は Twitter, Inc.、Facebook は Facebook 株式会社、LINE は LINE 株式会社、前略プロフィールは株式会社ザッパラスのサービスです。また、リアルとは短文を投稿できる自分専用の掲示板・日記の総称を指します。

※ iPhone は Apple Inc.、Android は Google Inc.、Windows は Microsoft 社の商標または登録商標です。